

いのち
生命のにぎわいとつながり

No.81

令和6年3月

現在は、第6の大量絶滅の時代と呼ばれています。開発による環境悪化、外来種問題、気候変動などの様々な要因により、多くの生物が種としての存続の危機に直面しています。今号では、千葉県が保全に取り組んでいるシャープゲンゴロウモドキ、ミヤコタナゴ、ヒメコマツの3種を巡る現状について特集します。

千葉県の絶滅危惧種に迫る危機



左上：ミヤコタナゴ、左下：シャープゲンゴロウモドキ、右：ヒメコマツ

千葉県では、県内の絶滅危惧種の中でも特に生息・生育状況が悪化している、シャープゲンゴロウモドキ、ミヤコタナゴ、ヒメコマツの3種について、回復計画を策定し、保全事業を行っています。いずれの種も、専門家や地元、市町村など様々な団体と協力しながら保全に取り組んでいますが、希少種保全には様々な課題、困難があります。今号では、この3種が近年抱えている問題と保全の取り組みについてご紹介します。

CONTENTS

- 1 千葉県の絶滅危惧種に迫る危機 1
- 2 企業と生物多様性セミナーを開催しました 3
- 3 房総のヒメコマツ観察会を開催しました 4
- 4 千葉県の外来種（コウライギギ） 4

◎シャープゲンゴロウモドキ

シャープゲンゴロウモドキは体長3cmほどのゲンゴロウの仲間で、一時は絶滅したと考えられていた希少な水生昆虫です。

シャープゲンゴロウモドキは関東地方に分布する個体群と、主に北陸に分布する個体群の2つに大きく分かれています。いずれも生息地は少なく、関東の個体群は千葉県のごく一部に生息するのみとなっています。

県内の個体数は一時増加傾向にありましたが、平成29年に激減し、その後、現在まで厳しい状況が続いています。

そのような中、令和5年9月の大雨で、シャープゲンゴロウモドキの生息地は大きな被害を受けてしまいました。

また、シャープゲンゴロウモドキは氷河期の遺存種（生き残り）であり、高温に弱く、水温が15℃を超えると卵や幼虫の発育が悪くなり、水温30℃ほどで幼虫、成虫ともに死亡してしまいます。そのため、去年の異常な夏の暑さと今年の暖冬は、シャープゲンゴロウモドキにとって非常に過酷な気象条件となっています。



シャープゲンゴロウモドキの再導入

危機的な状況が続いていますが、幼虫・成虫の個体数や生息環境などのモニタリング、生息に適した水辺環境の整備、万が一のときに絶滅を回避するため、水族館など安全な施設で飼育する「生息域外保全」など、保全のための取組を続けています。さらに、過去の生息地に生息域外保全の飼育個体を放して、野外で定着できるかをみる、試験的再導入も実施しています。

今後は生息数を回復させるため、大雨で被害を受けた生息地の整備を早急に進めるとともに、生息域外保全個体の再導入、さらには現在野生の個体群が

生息している場所に域外保全個体を放す、「補強」についても検討しています。

◎ミヤコタナゴ

ミヤコタナゴは、体長3～5cmほどのタナゴの仲間です。かつては関東に広く分布していましたが、生息環境の悪化などによって数や生息地を減らし、現在は千葉県と栃木県の一部に生息するのみとなっています。ミヤコタナゴを含むタナゴ類は、イシガイ類などの二枚貝に産卵する習性があるため、ミヤコタナゴを守るためにはイシガイ類を含めた生息地の生き物や環境をまとめて保全していくことが必要です。

しかし近年は強烈な台風の襲来が増え、水路の崩落や土砂の流入などの大きな環境変化が起こることが増えてきました。また、タイリクバラタナゴやヤリタナゴ（国内外来種）といった外来タナゴ類、ブラックバス、ヌマムツなどの外来魚が新たに確認されている生息地もあり、餌や産卵母貝などの資源をめぐる競合や、捕食など本種に対する直接的な影響も生じています。さらには、前号（80号）で取りあげたアライグマによる二枚貝類の食害が2年ほど前からミヤコタナゴの生息地でも確認されており、二枚貝類の減少も起こっています。



崩落した水路（現在は復旧済み）

このように様々な課題を抱えているミヤコタナゴですが、定期的なモニタリングや水路の環境整備を行い、環境の変化があった際にすぐ対応ができるよう体制を整えています。また近隣でのアライグマの捕獲や、水路一帯での外来魚の捕獲・駆除など、外来種への対策も進めています。

◎ヒメコマツ

ヒメコマツはマツの一種で、5本の葉が束になるゴヨウマツの仲間です。ゴヨウマツの仲間は日本全

国の山地に分布していますが、千葉県のカメヤマツは、他の集団から地理的に独立した比較的標高の低い場所に生育しており、氷河期の遺存種として注目されてきました。かつては1,000本単位で生育していた房総丘陵のカメヤマツですが、1970年代以降主に松枯れ病が原因で大幅に数を減らし、現在は70本程度になってしまっています。

現在は松枯れ病による影響は少し落ち着きを見せていますが、代わりに近年の減少の主な原因となっているのが、台風のような大規模な風水害です。カメヤマツは切り立った崖などに生えていることが多く、大雨による崖崩れによる生息地の破壊や、強風による幹折れが原因で消失してしまう個体が増加しています。



幹折れしたカメヤマツ

風水害による消失は対策が難しく、台風などからそれぞれの個体を守る確実な手立てはありません。そのため、モニタリングにより各個体の生育状況や消失・枯死の状況を定期的に把握するとともに、試験地での植栽や生息地で新しく芽生えてきた実生の保護などを行い、消失が起こっても次の世代が健全に育つことができるよう保全活動を続けています。

(西川 歩美/村井 貴幸/千葉県生物多様性センター)

企業と生物多様性セミナーを開催しました 令和6年2月21日(水)

第26回となる企業と生物多様性セミナーを開催しました。

2030年度までに陸と海の30%以上を保全する目標「30by30」の実現に向け、企業の自然への影響を評価・情報開示する国際的な枠組み「TNFD」が設立される等の国際的な動向を踏まえ、国が新たに始めた認定制度「自然共生サイト(OECM)」を始めました。今回は、すでにこの制度による認定を受け、生物多様性の保全に取り組んでいるNECの金成かほる氏より、「NEC我孫子事業場での生物多様性保全活動：自然共生サイトの一事例として」と題して、実際の生物多様性保全活動の内容と自然共生サイト申請、登録への流れ、今後の展望についてご講演いただきました。



講演の様子

また、生物多様性ちば企業ネットワーク参加企業からは、「OECM100か所プロジェクト ～災害に強い地域づくりに向けて～」と題し、損害保険ジャパン株式会社の加藤拓氏より、自然共生サイト申請を地域に展開し、全国の地域社会への普及啓発につながる取り組みについて事例発表をいただきました。

千葉県からの報告としては「千葉県の外来昆虫について」と題し、ヒアリ、ツヤハダゴマダラカミキリなどの特定外来生物の昆虫を中心に、千葉県の外来昆虫の現状について報告しました。

当日は32名の参加者があり、企業や自治体、里山活動団体など様々な皆様にお越しいただきました。質疑応答も活発に行われ、自然共生サイトの登録や、普及啓発の手法についての実際的な質問が数多く寄せられ、各企業や団体の自然共生サイトへの関心、生物多様性保全への意識の高まりを感じさせるセミナーとなりました。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

房総のヒメコマツ観察会を 開催しました 令和6年1月27日(土)

先の記事でご紹介したヒメコマツについて、房総半島のヒメコマツがどのように生育しているのかを知っていただくため、君津市豊英島でヒメコマツの観察会を開催しました。当日は県立中央博物館の尾崎煙雄氏、西内李佳氏、現地を管理しているちば千年の森をつくる会の方々に案内と解説をしていただきました。



豊英島での観察会の様子

今回の観察会では、豊英島内にある2つの植栽試験地を見せていただきました。1つ目は平地の試験地で、ヒメコマツを間近に見ながら、その特徴や房総半島のヒメコマツの状況についてご説明いただきました。野生ではなかなか見ることが難しいヒメコマツを間近で見られることもあって、参加者のみなさんも熱心に観察、質問をされていました。また松枯れ病の原因となるマツノザイセンチュウを媒介するマツノダガラカミキリの食痕も観察できました。2つ目は斜面の試験地で、こちらではヒメコマツの自生地に近い環境で生育試験をしている様子を見せていただきました。人にとっては歩くのが難しいような斜面ですが、ヒメコマツはたくましく成長していました。このまま健全に育ってくれることを願うばかりです。

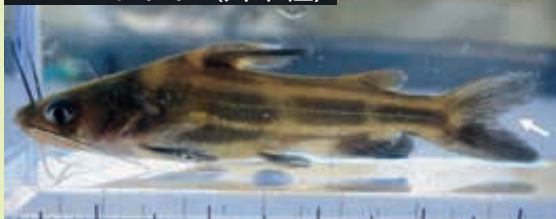
2時間ほどの行程でしたが、ヒメコマツの保全現場をじっくりと堪能でき、よい観察会となりました。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

コウライギギ

コウライギギ (外来種)



ギバチ (在来種)



東アジア原産の外来種コウライギギは全長20cmほどのナマズの仲間で、2008年に茨城県の霞ヶ浦で発見されたのを契機に、関東地方の各地で発見されるようになりました。千葉県内では、印旛沼や手賀沼及び周辺の流入河川等、県北部を中心に侵入・定着が確認されています。

コウライギギは小魚、エビ類、昆虫や貝類等の様々な水生動物を食べるため、在来生態系に多大な悪影響を与える恐れがあります。また、捕食による水産業への影響や、背ビレや胸ビレにある鋭い棘によって漁業者が怪我をするといった被害も生じています。これらのことから、コウライギギへの迅速な防除対策が望まれており、2016年より特定外来生物に指定されています。飼育や生きたままの運搬等が禁じられているので、注意が必要です。

千葉県内には、近縁の在来種ギバチが県南部の丘陵地帯を中心に河川や水路等に広く生息しています。コウライギギはギバチと比べて尾ビレが深く切れ込むなどの特徴から区別できますが(図・白色の矢印)、両種は非常によく似た姿をしています。ギバチと誤ってコウライギギを飼育しないよう注意が必要なのは当然ですが、コウライギギと誤ってギバチを駆除してしまわないよう、気を付けていただきたいと思います。特に、県北部はギバチとコウライギギの両種が生息していますので(ただし、ギバチの生息地は少ない)、似たような魚を捕獲された際は、尾ビレ等の特徴をしっかりと確認するようにしましょう。

(加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No81 令和6年3月31日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

